

交通アクセス

電車を利用

- 東武東上線**
 - 東武練馬(大東文化大学前)駅北口下車
無料スクールバスで約7分(スクールバス乗り場まで徒歩5分)
- 都営三田線**
 - 西台(大東文化大学前)駅西口下車 徒歩9分

路線バスを利用

- 東武東上線**
 - 東武練馬(大東文化大学前)駅北口下車
浮間舟渡駅行高島六の橋バス停下車
 - 成増駅北口下車
赤羽駅西口行、大東文化大学バス停下車
- JR**
 - 赤羽駅西口下車
成増駅北口行約20分大東文化大学バス停下車

キャンパス周辺MAP



※本案内は仏教文学会ホームページ
(<http://bukkyoubun.jp/>)にも掲載しております。

※下記のホームページでも御覧いただけます。

「大東文化大学 板橋キャンパスの紹介・アクセス」
(<http://www.daito.ac.jp/access/itabashi.html>)

仏教文学会6月例会シンポジウム

《冥界》というもうひとつの世界

— 『日本霊異記』の国家観と歴史叙述—

発表要旨

日 時：平成30年（2018）6月9日（土）14：00～17：30

会 場：大東文化会館ホール

『日本霊異記』は天皇を中心とした《編年体》の形式で説話を集積・再構成して、律令国家形成期の日本国の国家と歴史を叙述した説話集ととらえることができる。南北朝から唐代の志怪小説や中国説話集の影響を受けつつも、そこには仏教系・道教系説話が混在し、日本神話の冥界観の反映もみられるなど、『日本霊異記』は独自の自土意識にもとづく国家観と歴史意識を新たに創り上げているとみることができよう。

《冥界》というもうひとつの世界を対極に置くことによって、中国説話集『冥報記』『金剛般若経集験記』等の影響の質を再検討するとともに、『日本霊異記』の内部から、そこに構築された国家観、歴史叙述を考える。（文責・藏中しのぶ）

■ 『冥報記』『日本霊異記』冥界説話の意義

■ 日本女子大学 三田明弘

今回、『日本霊異記』の冥界説話をテーマにシンポジウムを実施するに当たり、二つの視点を提示させて頂いた。一つは、『冥報記』と『日本霊異記』が何れも律令国家の形成期を説話の集積によって再構築・再検討する歴史意識の強い説話集であるということ、もう一つは、これらの説話集に登場する冥界は、すべての人間の運命を官僚システムによって管理しつつ永久に存続し続ける国家像を提示しているということである。

『冥報記』が主に描くのは、唐の太宗の貞観期とその前後の時代である。『貞観政要』によって具体的イメージが定着した黄金時代が、『冥報記』では全く異なる理論によって描かれている。冥界と唐王朝という二つの国家を往還する貞観期の功臣たちによって、唐王朝は相対化され、天命を受けた名君の帝国の絶対的權威は揺らぐこととなるのである。

『日本霊異記』は、説話の様々なディテールに大和朝廷による律令国家としての国土の開発と整備の痕跡を見ることが出来るが、その発展を仏法が背後から支えているという構造になっている。冥界は仏法により統御された国家像を示し、大和朝廷の目指す方向性の正当性を担保する機能を果たしている。

六朝期の説話集から『冥報記』を経て『日本霊異記』に至る冥界説話の流れを瞥見しつつ、これらの点について論じる。

■ 『日本霊異記』の「地獄」説話—十王思想・閻羅王・地藏菩薩—

■ 大東文化大学 山口敦史

『日本霊異記』のいわゆる〈冥界遊行譚〉を考えるにあたって、今回は「地獄」描写をめぐる問題について、考察したい。

『日本霊異記』には「地獄」「閻羅王」「琰魔国」などの名称が多く表記され、『霊異記』説話の中で大きな比重を占めている。これらについては、中国仏教の冥界観の影響であるとよく言われるが、中国の漢訳仏典の世界観の反映なのか、いわゆる中国仏教説話集における冥界遊行譚の影響下に作成されたものなのか、さらに精査する必要がある。

『日本霊異記』の撰述者・景戒に確実に影響を与えたであろう説話集として『冥報記』と『金剛

般若経集験記』がある。『冥報記』での「地獄」の語のある説話は、一話のみであり、「閻羅王」の語は、二話にのみ見られる。『冥報記』説話には「太山府君」の語も見られ、仏教由来の「閻羅王」と道教由来の「太山府君」の共存が見られる。一方、『金剛般若経集験記』では、「地獄」の語が七話、「閻羅王」は三話に見られ、『冥報記』と比較して、地獄説話の多様性ということが言えよう。

『日本霊異記』下巻第九縁には、「我は閻羅王、汝が国に地蔵菩薩と称す、是れなり」とあり、閻羅王の本地が地蔵菩薩だという思想が見られる。これについては中国、または日本で作成された偽経『地蔵十王経』などの影響などが指摘されていたが、この本質をどう考えるかについては、まだ検討の余地がある。中国では〈経典〉としてこの思想が表明されているが、『日本霊異記』ではかかる思想を〈説話表現〉として表明しているところに意義があるのだろうと考える。それは、閻羅王が「汝が国」つまり日本国一における「地蔵菩薩」なのだ、と発言しているところに表れている。このような、〈日本国〉と表明することの意味について考えてみたい。

■「他国」発見の歴史叙述——『日本霊異記』中巻の冥界描写と法身

■立命館大学（非） 渡部亮一

『日本霊異記』は「他国」に対する「自土」日本国の奇事を収集し、それを並べ記す。また奇事の出現には、天皇の徳が関与するという。聖徳太子が聖武天皇に生まれ変わり、また嵯峨天皇が「人家家」であったなど、景戒は天皇そのものの歴史も語る。言うなれば『霊異記』は、外書伝来の過去から嵯峨天皇の現代に至る、宗教実践者による歴史叙述（あるいは神話創造）のテキストである。

『霊異記』中巻は、序に「勝宝応真聖武太上天皇」について記し、第一縁はその「大誓願」に始まる。それは上巻の同天皇代とは異なる、新たな天皇による日本国の始まりを意味しよう。そして閻羅王の住む世界（冥界）、また法身の世界（法界）は、いずれも中巻で初めて出現する。閻羅王の宮と行基の宮の関係、ヨモツヘグヒの問題など、『霊異記』の冥界の特異性はさまざまに語られている。

ただし、ここでは例えば閻羅王が智光を「豊葦原水穂国」の者と呼んだ点などに着目したい。閻羅王らの住む世界は、景戒が生きる日本国の外部、つまり新たに語られ始めた「他国」であった。そしてこの「他国」は、聖であり天心をもつ天皇が現れ、仏法が身体化した法身世界の存在が確信される中で、（死と再生の手続きにより）往還可能となったのではないか。中国仏教における仏身論と仏教世俗化などを念頭に置きつつ、分析を加えてみたい。

■パネル・ディスカッション

■司会 藏中しのぶ